

ふるさとの 植物を守ろう

No. 20 September 2016

植物園と市民で進める
植物多様性保全ニュース

Japan Association of Botanical Gardens

公益社団法人 日本植物園協会

「絶滅危惧植物保全データベース」について

日本植物園協会 植物多様性保全委員会 絶滅危惧植物保全データベース分科会 川村 東文

データベース立ち上げの背景

日本植物園協会は、わが国の野生植物の保全を重要な事業と位置付け、植物多様性保全拠点園ネットワークを中核とする会員園の活動による絶滅危惧植物の保全や種子保存など、様々な成果を上げています。一方で、日本の絶滅のおそれのある維管束植物は1,779種類（2012年環境省第4次レッドリスト）と他の生物と比べると圧倒的に数が多く、またそれぞれ種ごとに異なった生物学的特性を持つため、より効果的な保全を進めるためには、未解明な部分が多いひとつひとつの種の生態や生理に関わる特性を知り、栽培や繁殖に関する知見を集積・共有し、一元化管理のもと将来へ継承することがとても重要なことです。

そうした背景を受けて、拠点園等の協力を得て、平成25年度に「絶滅危惧植物保全データベース」の公開を協会ホームページ内で開始しました。協会の生物多様性保全の指針「植物多様性保全2020年目標」のひとつに「2020年までに日本産絶滅危惧植物種を網羅する効果的な保全手法を提示する」ことが掲げられ、本データベースは、日本産絶滅危惧植物種を網羅する生育特性情報・栽培繁殖特性情報の総覧として、大きな期待が寄せられているところです。

データベースの内容

データベースは、環境省第4次レッドリスト掲載種をはじめ県など地方自治体のレッドリスト掲載種も含めた国内の絶滅のおそれのある維管束植物種約2,200種が掲載され、それぞれの種ごとに会員園の保有状況のほか、自生地の状況情報、生物学的特性、栽培特性が記載されています。なお、自生地が特定できる詳細な位置情報は非公開としています。

◆「情報を見る」

データベースは、協会ホームページ内のサイト（http://www.syokubutsuen-kyokai.jp/hozen_db/view/index.php）で公開されており、いつでもだれでも上記情報の閲覧が可能となっています。検索・ソート機能が充実しているほか、外部リンクによりすべての絶滅危惧植物の各都道府県におけるランクが地図表記で確認ができるようになりました。現在、生育特性情報（一部の項目のみの情報も含む）が寄せられている種数は約560種となっています。

◆「情報を提供する」

データベースへの情報の提供は、30園を超える植物多様性保全拠点園が中心となり、保有している絶滅危惧植物の栽培繁殖特性情報や、調査研究および種子採取を行っている絶滅危惧植物の生育特性情報、専門家等からの聞き取り情報、文献情報などが随時入力されています。新たに入力された情報はデータベース分科会において主に非公開とすべき情報が混在していないかどうかスクリーニングを行った上で随時公開しています。なお、情報提供は協会会員（園）のみ可能で、ログインIDとパスワードが必要です。入力方法は別途マニュアルがあり、HPから入手可能です。

今後の展望

データベース運用開始後3年が経ち徐々に情報の充実が進んできているものの、情報入力種数や記載されている情報量・質ともに対象種を「網羅」しているものとはいえない状況です。絶滅危惧植物の保全にかかわる多くの研究者や関係者のみなさまの期待に応え、少しでも保全に有効なデータベースとするためにも、これまで以上の情報量の充実に努める必要があります。

植物多様性保全拠点園をはじめ協会会員（園）のみなさまにおかれては、自園で保有する対象種の栽培繁殖特性情報や、現在行っている調査および種子採取対象種の生育特性情報の入力を進めて

いただくとともに、今後はこれまで以上に専門家や関係協力者等からの聞き取り情報や文献情報の積極的な入力を進めていくことが必要です。みなさまのご協力をお願いいたします。



絶滅危惧植物の栽培状況

長崎県対馬市との連携協定の締結について

京都府立植物園 長澤 淳一

京都府立植物園と対馬市は、対馬に生育する固有種または稀少種の保存を目的とした調査研究において連携を推進するため、平成 27 年 10 月 16 日、京都府立植物園において、対馬市市民協働・自然共生課荒木静也課長と京都府立植物園長との間で協定を締結した。

対馬は南北 82km、東西 18km の細長い島で、山林が 89% を占め、木本類 300 種、草本類約 800 種、シダ類 130 種の計 1200 種余りの植物が自生している。博多まで 138km、韓国の釜山までは約 49.5km の場所に位置し、約 10 万年くらい前までは大陸と陸続きで、多くの動植物が対馬を通過

日本本土の方に移動したといわれている。この地理的要因から対馬には大陸系の植物が遺存的に生育していたり、近縁種が朝鮮半島や大陸に見られる固有種が知られていたりして、日本のフロラの中で特異な地位を占め、日本産植物の起源を知る上で重要な地域であると考えられている。ところが近年シカの増加が著しく、推定で 33,000 頭が生育しているとされ、林床植生が食い荒らされ衰退が目立ち、希少植物を保全するうえで大きな問題となっている。

このような対馬の現状について、対馬の稀少種が絶滅する前に緊急避難的に植物園で系統保存で



オオチョウジガマズミ



締結時の様子

きないかという相談を、対馬を研究のフィールドにされている京都大学の東浩司先生や対馬で保護活動に携わっておられる国分英俊先生から受けた。一方で、対馬市から植物園協会に対しても専門性を持った機関との提携を図りたいとの依頼があった。対馬市としては自生地での保護は行おうが、絶滅リスクを分散させるために、専門的な知識や設備を持った複数の植物園等で系統保存をお願いしたい

とのことであった。

これら各方面からの依頼に応える形で、対馬の貴重な植物の保護増殖に取り組むこととして上記の協定を結び、現在約40種の植物を預かって栽培管理している。また、ツシヤママネコの繁殖に取り組んでいる京都市動物園とも連携して対馬の自然を守る啓発活動にも取り組んでいる。

特別展示「私たちが住んでいる地域の絶滅危惧植物」の報告

大阪市立大学理学部附属植物園 厚井 聡

身近な植物の中にも絶滅が心配されている植物がいることを知ってもらおうと、2016年3月から5月にかけて、特別展示「私たちが住んでいる地域の絶滅危惧植物」（主催：大阪市立大学理学部附属植物園、後援：日本植物園協会）を開催しました。

今回の展示では、普段はバックヤードにおいて非公開で栽培している種類を中心に、絶滅危惧種23種を入園口近くで屋外展示しました。なるべく身近な絶滅危惧種を知ってもらえるように、環境省レッドリストに掲載されている種類だけでなく、近畿地方や大阪府で絶滅危惧種に指定されている種類も展示しました。また、この特別展示に合わせて、園内に植栽されている絶滅危惧種の植物名ラベルを写真付きのものに更新し、絶滅危惧種であることを示すために植物園協会の「植物SOSマーク」を表示しました。各都道府県における絶滅危惧種のランクを日本地図で表示するなどして、絶滅の危険度などを説明した解説板も併設しました。

開催初日の3月13日は、植物園のある大阪府交野市で行われた「環境フェスタ in 交野 2016」と連携し、フェスタのチラシを持参された方の入園料を割引にしたほか、展示している鉢植え植物を中心

に解説する案内会も実施しました。期間中は、園内の絶滅危惧種を観察しながら質問に答えてもらうクイズラリーを実施し、参加者にはコスモス、ゴマ、ワタの種子を景品としてお渡ししました。

今回展示した植物のひとつにモウセンゴケ科のムジナモがあります。本園の株は京都の巨椋池から採集されたものですが、その後の干拓事業により巨椋池のムジナモは他の貴重な水生植物とともに消失してしまいました。コケリンドウやユキヤナギ、キキョウなど、野草としてあまり気に留めないような種類が絶滅の危機に瀕していることに多くの方が驚かれたようでした。

絶滅危惧種を取り上げた企画は本園では初めてであり、約半年かけて準備を行いました。この企画により植物名ラベルや解説パネルの作成のノウハウが蓄積されたほか、これまでは非公開だった株を公開したことで、系統保存に加えて普及に活用するという新たな目的も加わりました。これらの経験を生かし、今後もこのような展示を開催してより多くの方に植物へ関心を持って頂き、植物園の役割についても発信していきたいと思えます。



展示の様子



初日の案内会

各園のコレクション紹介

沖縄美ら島財団における沖縄産ラン科植物の保存について

(一財) 沖縄美ら島財団 総合研究センター 阿部 篤志

沖縄美ら島財団では、沖縄県の絶滅危惧植物を対象に過去20年以上にわたり、自生地における生育状況調査、生息域外保全を目的とした種子や株の収集を継続しています。また、地域野生植物拠点園、特定植物拠点園(ラン科等)として独自の調査研究だけでなく環境省や沖縄県の公的事業(種子収集・生息域外保全及び野生復帰モデル事業・ジェノタイピング事業・レッドデータブック改訂作業等)にも積極的に協力しています。

当財団では、沖縄の絶滅危惧植物587種のうち、約130種(22%)を保存しています。特に、ラン科植物の保存には力を入れており、希少ラン96種のうち県内5島産の希少ランを約50種(52%)保存しています。沖縄のラン科植物は、採集や開発など人為的攪乱の影響により絶滅危惧種の割合が約8割(県内自生のラン科116種中96種が絶滅危惧種)も占める分類群です。

これらラン類の栽培管理については、無菌播種・無菌培養・順化を経て増殖し、種ごとの生育特性に

応じて、通気性が高く遮光されたラスパイプハウスと、20℃前後を保ち湿度が高めの空調温室で育成しています。産地ごとに5~10株程度を目標に系統保存し、生息域外保全や調査研究に活用しています。多く増えた株は展示に利用し、主に当財団が管理運営する国営沖縄記念公園(熱帯ドリームセンター)で、沖縄の野生ランの美しさや絶滅危機の現状を広く知ってもらうため、増殖したイリオモテランやナゴラン等の着生ラン、オナガエビネやカクチョウラン等の地生ランを開花期に併せて特別展示しています。また、熱帯・亜熱帯都市緑化植物園では毎年開催している「沖縄の貴重な植物展」においても多種の野生ランを展示紹介してきました。

近年の取り組みとしては、平成26年度から実施している当財団プロジェクト「沖縄諸島の絶滅危惧植物に関する現況把握調査」の一環で、今年度から地方自治体と連携し、ナゴラン(沖縄県版で絶滅危惧IA類)の生息域外保全および野生復帰に向けた事業をスタートしました。



増殖株を活用したイリオモテランの特別展示(熱帯ドリームセンター)



ハガクレナガミランの生息域外保全株(国内希少野生動植物種)

このニュースレターが、植物とその保全に関する情報交換の場の一つとなるよう、工夫していきたいと思えます。各地の諸団体の取り組みもご紹介していきますので、共有したい情報やご意見等を、右記の協会事務局宛にお寄せください。よろしくお願いいたします。



編集・発行 公益社団法人 日本植物園協会

〒114-0014 東京都北区田端 1-15-11-201

TEL: 03-5685-1431 FAX: 03-5685-1453

URL: <http://syokubutsuen-kyokai.jp/>

E-mail: seed@syokubutsuen-kyokai.jp